

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認雑誌第六二七号
平成三十年三月一日発行(第百二十一卷第三号)

ホトトギス

三月号



風雅の小筈 〔三〕

廣 太 郎

今回は俳句会について。ホトトギス誌友殆どの方が定期的な句会に参加
実は私は兵庫県芦屋市で生れ育つて、大学を出てホトトギス社に就職す
る為に上京するまでは、大の出不精で、旅行というものが面倒臭くて仕方
がなかったのである。それが俳句を生業にするようになり、自ずと旅も増
え、自然に触れる喜びも増えて行き今に至っているが、そういった意味で
も俳句の吟行というのは大切にしたいと考えている。

その吟行について、私はよく立場上、というのは烏滸がましいが、ホト
トギス大会等では、現地に着くと、いや現地までもある特定のタクシー又
は家用車で特定少数の人達とピンポイントで吟行地に行き、又車で移動
するというやり方で御案内頂く。ある年大阪でホトトギス大会が行われた
時、天王寺の安居神社という場所をスポット的に車で御案内頂いた。真田
幸村終焉の場所として有名であるが、車であると、地理的にはなかなか把
握出来なかったのを覚えている。そしてその何年後か奇しくも又大阪の天
王寺界限でホトトギス大会が行われた時には、私は車での移動はせずに天
王寺七坂という名所を地図を片手に有志で全て徒歩で吟行したのである。
すると行き着いた先に数年前に来た安居神社があるではないか。そう、や
はり吟行は足で歩いて色々自分で散策するのがベストなのではないだろう
か。実は私が車に極力乗らないのは、酒好きや、誰かさんの運転が危ない
という事も、まあ無きにしも非ずではあるが、歩いたり、せめても公共の
交通機関を使う事により、未知の土地や、見慣れた場所でも自然をより身
近に感じる事が出来ると信じているからなのである。

句日記 汀子

平成二十九年三月一日 ロイヤル俳壇

ありしともあらざりしとも春の雷
東風荒き日の思ひ出と記憶して
着陸をやり直す東風荒るる朝
心には強きことも承知の島泊り
三月二日 依頼のための句

木々芽吹き初め思ひ出の甦る
なつかしき会話偲びてあたたかし
花 便人の 暮しに 加はりぬ
三月四日 芦屋ホトギス会

白酒に禁酒とやかく言はずとも
東風を来てくつるぐ部屋の明るさよ
三月五日 下萌句会

春の山とて親しまむ六甲は
旅疲れとも春の風邪心地とも
三月五日 「森の座」祝句

木々芽吹くこれより空の明るさよ
万緑の一樹一樹にある未来
考への立ち止りつつあたたかし
三月九日 清交社

春雷のありし朝を発ちて来し
何の芽か分らぬことも楽しみに
春の風邪いつか忘れて旅にあり
皆知つてゐる春雷を知らざりし
日を抱き 雨を 纏ひぬ 春の山
ものの芽のその後忘れて旅がちに
春の風邪忘るるほどに癒えしこと
三月十日 工業倶楽部

この 奥の 消息 伝へ 春の 川
原因の分らぬままに春を病む
ただ祈るばかりの春となりけり
三月十一日 関東ホトギス俳句大会前日句会

見学といふ春寒き道案内
玻璃越しに見てゐる限り春らしく
春寒し記憶の回路つながらず
近づけば残雪の山消えてゆく
通が来しこと残雪の山仰ぐ
三月十二日 関東ホトギス俳句大会

静けさは春めく心解きゆく
旅の春眼 葉差して 葉飲む
春の旅心にかかして 事一つ
三月十二日 関東ホトギス同人会

これよりの芽吹待たるる山の色
裏山の稜線 模範と春らしく
垣間見し暮し 質素や春寒し
三月十三日 アサヒカルチャー

指先に春寒 残りをりしこと
残雪の山々 見つつ行けり
春といふ不確かな日々なりしこと
三月十四日 大阪倶楽部

さつきありたる初雷のことなりし
初雷の芽かそろそろ分り来る頃よ
慣れ過ぎし暮らしの便利暖かし
まだ何の芽とも分からずありけり
三月十四日 絹業倶楽部

蜩舟風をさまりて来し湖に
如月の明るき空に旅疲れ
蜩汁好きと知られてしまひけり
次々と仕事 山を崩す 春
三月十五日 夏潮句会

山笑ひ海のかがよび初めし日よ
スケジュール次々決まり山笑ふ
遅るるといふ電車事故 山笑ふ
木々芽吹き初め 気配の中に
文章の構想決まり山笑ふ
三月十七日 アネモネ句会

遙かなる卒業の日を引寄せ
病む友へ祈りの深し 弥生尽
脱稿の日々卒業の思ひあり
庭椿落ちて所在を確かむる
あたたかくなればなればと祈ること
三月十八日 ホトギス社吟行会

大都市の真ん中にてあたたかし
三月は前向きにのり出席す
あたたかき笑顔 次々席に着く
この辺りよく通る道あたたかし
三月二十一日 有恒俳句会

木々の芽のふくらみ仔細見て通る
雁風呂と思へばありぬ 旅心
皆年を重ねて 難に托すもの
今日の雨花をいざなふものならん
きつと花咲き満つ頃となりぬべし
今日一と日雨に豊かな紅椿
三月二十一日 無名会

ものの芽にかがみて語りかくるもの
これよりの芽の何か分らぬ二三日
旅予定花の便りの中にある
仕事の手止めて出してみるもの芽に
三月二十三日 きざらぎ会

癒えたまへ今日暖かき日なりせば
暖かき心 寄せ合ひ祈ること
今はただ見守るばかり暖かし
三月二十五日 時雨句会

花の旅近づくと切符配られし
朗報を心待ちして祈る春
次々と予定消しゆく 春灯
三月二十五日 句会と講演の会

これよりは花の仔細を待つ日々
又逢ひて花の消息交しけり
芹の水映して雲の早さかな
闘病といふ消息も花の頃

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年三月二日 蕉心会

四旬節始まる 朝春時雨
 蝌蚪の紐未来へ黙を解きつ
 白々と螺旋階段 冴返る
 春寒き風 舐め回す水面かな
 挿木して館育んでゆけるも
 熊笹は終の褥や 椿落つ
 落椿水に朽ちゆくまでの艶
 この蝌蚪も 東京都江東区民

三月三日 角川俳句 出句
 虚子館に二月礼者の袴ける
 摂津へと江戸より二月礼者かな
 その角を春一番の舐め尽す
 薄水に突つ込んでゆく魚の影
 寒明けてなほも列島白銀に
 芝焼いて大邸宅の模様替
 白銀を割り飛び出せる露の臺
 移築てふ思ひ出の家冴返る
 梅が香に朝の空気の入れ替る
 梅が香を啄んでゐる一羽かな
 船音を吸うて大川水温む

三月三日 カトリック新聞選考時
 下萌や右近の御霊輝かせ
 三月四日 芦屋ホトギス会
 朝東風に富嶽は雲を鎧ひけり
 大試験 吾子は 大学 五年 生
 三月五日 野分会 芦屋例会
 魂を蕊より放ち 椿落つ
 椿落つ一直線といふ 刹那

葉の艶に照らし出されて玉椿
 三月五日 青嵐会 芦屋例会
 一本の土筆に地球塗り替はる
 土筆野や北半球を押し上げて
 春雷に夢の続きを持ち去られ
 春雷に第六感の動き出す

三月九日 土筆会
 影揺れて言の葉揺れて春障子
 春の山稜線模糊と明け初泥む
 母子草庭柔らかく暮れかむ
 春の山より立ち上る富嶽かな
 春の山よりの流れは楽を生み
 三月十一日 関東ホトギス同人会 大会
 稜線を尖らせて風冴返る
 吊橋の真中最も冴返る
 淡雪を舞はせて那須の峡深し
 平家塚とは密やかに麗かに
 み吉野へ心馳せゆく西行忌

三月十三日 朝日カルチャー若草句会
 一言に刺ある君や茨の芽
 春の土水惑屋の目覚かな
 青き踏む活断層を凹ませて
 恋心ほどに薔薇の芽綻びぬ
 薔薇の芽の百万本が君を待つ
 青き踏む大東京のど真ん中

三月十五日 北國文芸選考時
 春の土より立ち上る志

三月十六日 登高会
 蒲公英の丈に大地の鼓動聞く
 万物を目覚めさせたる春の雷
 春炬燵猫も素通りして行きぬ
 蒲公英の高さに風の及ばざる
 子等の歌子等の息待つ鼓草
 春雷は虚子の一喝かも知れぬ

三月十八日 ホトギス社吟行会

句座ぬくし勝手知つたるピルの中
 東風磨く東京駅の赤れんぐわ
 東下り三十五年首都うらら
 三月二十日 目黒學園句会
 太白の暮れ切らざるも春の星
 垣繕ふ百万石の威を放ち
 十字架の道行確と青き踏む
 青き踏む青き地球を宥めつつ
 丑三つの落ちて来さうな春の星

三月二十五日 ホトギス社句会
 芹の水流して虚子の散歩道
 涅槃図を掲げ大本山の格
 高僧を訪へば涅槃図迎へくれ
 句会場てふ初花の華やぎに

三月二十六日 青嵐会 東京例会
 春雨に鎮もるフットサルコート
 濡れ色といふパスジートの主張かな
 初花に鳥の狼籍始まれり
 花冷を見下してあるタワイかな
 八荒の遠出してきたやうな空

三月二十六日 野分会 東京例会
 椿落つ季節恨んでゐるやうに
 椿落つ鼓動大地に吸ひ込まれ
 開帳の古刹に 大いなる忌日
 枝といふ柳を解かれて椿落つ

三月二十八日 若水句会
 挿木して庭の未来の始まれり
 ボンネットバス野蒜の香運び行く
 吾子生れし時の挿木は大木に
 彼岸会の境内鳩の群れたがる
 挿木して育まれゆくワイナリー

三月二十九日 むさし野吟行会
 シート敷くより花人となりゆけり
 椿落つ空に微笑み返り上げて
 すらここの少女太陽蹴り上げて

雑詠

廣太郎 選

鉦叩聞けばすぐ来る七回忌 朝倉 井上醇女
 ちちる虫参道さびれゆくばかり 同
 里の景黄金の色と曼珠沙華 同
 初紅葉葉ここにもありし渡月橋 神戸 後藤比奈夫
 月を背に背山妹山むつまじき 同
 名園に息づく和歌の涼しさよ 同
 榛名富士坐る花野を折り敷いて 相模原 木村享史
 山の神湖の女神と花野の夜 同
 雨降つてをらざるごとく西の市 東京 田丸千種
 昔より吉原赤し西の市 同
 三の酉水といふ字の火事封じ 同
 日矢の沖冬近づけて遠ざけて 奈良 古賀しぐれ
 湖を射る一の矢二の矢冬日燦 同
 からつぽの波止は日溜鴨溜 同
 はみ出して売るものばかり西の市 神戸 和田華凜
 七井橋渡れば冬の虹たちぬ 同
 種採つて鶏頭の火の消えにけり 同

分校にあの日の匂ひ秋惜む 同 藤井啓子
 背中より人は老いゆく温め酒 同
 石路明りより虚子館の一步かな 同
 小鳥来るコーヒーカップそつと置き 龍ヶ崎 今橋眞理子
 荘とぎす燠炉の火色惜しみつつ 同
 末枯の色なき色を深めゆく 同
 天上にペテロ漁る 雲 熊本 岩岡中正
 教会の掃除当番小鳥来る 同
 柿はたわわに裏山は崩落す 同
 やや寒に部屋の明りをつけてみる 袋井 湖東紀子
 やや寒の少し早めの夕餉かな 同
 続かざる晴を選びて冬支度 同
 詩は風のごとく生まれて竹の春 渋川 木暮陶句郎
 目の前の未来信じてばつた跳ぶ 同
 残菊や人は競うて傷つきぬ 同
 潮風の届く酒蔵 蔦紅葉 神戸 山田佳乃
 大樽を据ゑたる石や昼の虫 同
 磨き上げ酒を醸さん今年米 同
 酒蔵の路地をはみ出す秋祭 同 涌羅由美
 露の世の歳月刻む 継柱 同
 新酒もて丹波杜氏の誇り満つ 同
 受験生二月の門をくぐりけり 東京 今井肖子
 あをぞらを二月の翼旋回す 同
 空ゆるぶ二月も二十日過ぎたれば 同

雑詠句評（二月号より）

マーラーの復活聴いてゐる夜食 宝塚 大石 勲

先日急逝された大石勲氏は今年の関西ホトトギス大会の中心となっておられた。

何度か体調を崩されながらも、頑張っておられたのは「復活」を聴いておられたからかとも思う。季題が「夜長」であれば、ゆったりとした時間を寛いでいらつしやるのかと思うのだが、「夜食」という季題である。根を詰めて作業されて気がついたら夜も遅くなっておられたのではないだろうかと思うと「夜食」という季題が痛々しく感じられる。心よりご冥福をお祈りする。（佳乃）

作者はお亡くなりになる寸前まで句会に参加されておられ、この句は筆者が最後に入選にさせて頂いた句ではなかったかと記憶している。御存知マーラー作曲交響曲第二番「復活」である。荘厳、長大な曲であるが、何か夜食自体もゴージャスな、ワインを傾けながら聴いているような雰囲気である。（廣太郎）

能面の月光宿す白さかな 神戸 和田華凜

この能は、月明りのもとで演じられている、いわゆる野外能の光景でしょケ。野外能といえ、**「薪能」**が有名。しかし、掲句からは**「薪能」**と断定できるものではなく、一般の社寺で催されている野外能と解するのが無難でしょう。この能面、「白」ということから能面の中でも代表作品ともいわれている女面と思われる。喜怒哀楽の定まらない女面が、月光によっていよいよ白く、微妙な動きによって表れる変化が、より妖しく、美しいものと思われる感動を詠んだ一句で、「白さかな」と詠嘆したことによって、その思いが読者にも伝わってくる。（公次）

展示している能面か、それとも実際野外能で演じられている面に月光が反射しているのかも知れないが、何れにせよ能面というのは不思議なもので、特にシテが演じている時、何とも豊かな表情を見せるものである。月光がその表情をより豊かに表現する役を担って幽玄の世界が目の前に拡がる。（廣太郎）

天地有情

心子選

新盆の子に磨きやる仏具かな
 初盆に伽羅の御香を注ぎにけり
 百合を手に初聖体の子等の列
 百合捧ぐ受胎告知の大使
 病みをれば長き夜さらに長からむ
 長き夜を話して尽きず虚子のこと
 里人も手伝ふ寺の冬支度
 北国やみなせかさるる冬支度
 身に入みて連句の世界学びたし
 朝の日を離さぬ芝生露の秋
 人生のけふの一と日の翳雲
 ふるさとは天にありけり翳雲
 大綿の消えて光と風のあと
 冬の海一人一人にある時間
 末枯の一氣に進む雨となる
 栗むいてむいてかばかりなりしかな
 摘みくれし十二単に似てをれど
 春秋の心一転せし卒寿

神戸 後藤比奈夫
 同 稲畑廣太郎
 東京 相模原 木村享史
 同 長岡 安原 葉
 同 西宮 本郷桂子
 同 熊本 岩岡中正
 同 神戸 和田華凜
 同 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 福山 竹下陶子
 同

年尾忌でありし昨日も今日も晴
 秋冷の探しても無き鍵ひとつ
 括られて残菊らしくなりにけり
 一反を任されてゐる案山子かな
 吾に来て吾を追ひ越す秋茜
 あの森にこの樹につくつく法師かな
 山に入る高きに黄葉多くなり
 伊豆に住み紅葉前線なる言葉
 年尾忌へ沖ゆくらくだたづさへて
 年尾忌の日だけ快晴なりし週
 晴れ渡る忌日の空や鳥渡る
 この湖の近くに山廬鳥渡る
 香りまで乾ききつたる濃紅梅
 白梅に満開といふ今のあり
 虚子単坐されたる阿蘇の芒原
 子規事典播くことも秋彼岸
 発車ベル響きわたりて駅夜寒
 秋雨に汽笛くぐもり出航す

東京 今井千鶴子
 同 神戸 三村純也
 吹田 大橋 暁
 同 熱海 嶋田 一步
 同 東京 大久保白村
 同 山田 潤子
 同 今井 肖子
 同 神戸 千原 叡子
 同 東京 高濱 朋子
 同